

# 豚の呼吸器病の実態調査について

宇田津士郎・泉 道雄・野川 幸 (宮崎県畜産試験場)

UDATSU, S., M.IZUMI and M.NOGAWA : An Investigation on Respiratory Organs Disease of Swine

豚の飼養頭数の増加と抗菌剤の使用規制等に伴い、1977年以降豚の呼吸器病の増加が目立っている。そこで我々は1980年から豚の慢性疾病 (特に呼吸器病) を取り上げと畜場出荷豚の肺病変の肉眼検査と各種疾病に対する血清の抗体検査を中心に実態を把握するとともに特定農家の調査を行ったのでその概要を報告する。報告にあたり、材料採取や肉眼検査に協力いただいた関係の食肉衛生検査所、また抗体検査にあたり抗原の分与に協力いただいた農林水産省家畜衛生試験場及び同北陸支場に感謝する。

## 1. 試験方法

県内の養豚地帯である宮崎市郡・東諸州市郡・南那珂市郡・児湯市郡地域 (以下A市郡という) 及び北諸州市郡・西諸州市郡地域 (以下B市郡という) から1980年9月~1981年3月にかけて出荷されたと畜場出荷豚100戸、971頭について食肉検査所で肉眼的に肺病変を検査するとともにそのうちの528頭については血清による抗体検査を実施した。肉眼検査では流行性肺炎 (SEP) によると思われる肺炎、ヘモフィルス感染症と思われる胸膜炎及び肺虫性肺炎を中心に検査した。また抗体検査はヘモフィルス、萎縮性鼻炎 (AR)、トキソプラズマ、コリネバクテリウム、豚インフルエンザについて実施した。更に特定農家の調査では48頭の肥育豚について出荷時抗体の検査を行い特に被害の大きいと考えられるヘモフィルス感染症について抗体陽性豚と抗体陰性豚について肥育日数・増体率等の比較を行った。

## 2. 試験結果と考察

1) 食肉衛生検査所で行った肉眼所見 (第1表) ではSEP性肺炎が66.9%、ヘモフィルス性肺炎 (胸膜炎) が55.3%、肺虫性肺炎が0.5%にみられた。

第1表 肉眼所見による検査成績

地区別	肺 虫		肺 炎		胸 膜 炎	
	陽性数 検査数	%	陽性数 検査数	%	陽性数 検査数	%
A 市 郡	4 666	0.6	479 666	71.9	350 666	52.6
B 市 郡	1 305	0.3	171 305	56.1	187 305	61.3
総 計	5 971	0.5	650 971	66.9	537 971	55.3

2) ヘモフィルス感染症に対する抗体保有率 (第2表) は抗体価20倍以上を完全陽性とすれば55.3%の陽性率となり先の食肉衛生検査所の肉眼所見の胸膜炎発生率と一致した。なお抗体価40倍以上を示す豚が28.8%にみられ

た。

第2表 ヘモフィルス、ブルロニューモニエ抗体保有状況

地区別	抗体価10倍以上		抗体価20倍以上		抗体価40倍以上	
	陽性数 検査数	%	陽性数 検査数	%	陽性数 検査数	%
A 市 郡	180 223	80.7	128 223	57.4	50 223	22.4
B 市 郡	236 305	77.4	164 305	53.8	102 305	33.4
総 計	416 528	78.8	292 528	55.3	152 528	28.8

3) ARの抗体保有率 (抗体価20倍以上を陽性) は72.2%と高かったが、一方食肉衛生検査所で肉眼的にARと診断されたものは少なかった。これは本病の感染が若令期の場合は鼻甲介等の変形が現われやすいが、その後の感染では著明でないことに由来する相違であり、また抗体陽性率が高かったのは若令期以降の感染が多いためと考えられる。

4) トキソプラズマ病の陽性率 (抗体価64倍以上) は4.2%と低かったがある特定の養豚場で陽性率が高くなる傾向がみられた。

5) コリネバクテリウム感染症 (抗体価16倍以上陽性) についてはA市郡地区で1.3%、B市郡地区で1.0%の陽性率であったが本疾病もトキソプラズマ病同様、特定農家で陽性率が高くなる傾向がみられた。

6) 豚インフルエンザウイルス (静岡1株) に対するHI抗体保有率 (HI抗体価40倍以上を陽性) は98.7%と高く養豚農家に完全に本病が浸潤していることが判明した。

7) 特定農家のヘモフィルス抗体陽性豚 (この場合調査豚の抗体価40倍以上) 及び陰性豚の比較から抗体陽性豚は陰性豚に比べ肥育日数で31.4日、総飼育日数 (出生から出荷迄の日数) で34.6日、出荷が遅れ、増体率でも、113.4gの差がみられた。

## 3. ま と め

以上の成績から呼吸器病の主因として、流行性肺炎、ヘモフィルス感染症、AR、豚インフルエンザ等が考えられるが、特定農家の調査結果から特にヘモフィルス感染症の被害が大きいものと考えられ本病に対する対策が急務である。またARの若令期における初期感染の防止や豚インフルエンザと他疾病との混合感染についても考慮する必要があり、これら疾病に対しての対策や問題点の究明のため更に試験を継続実施中である。